

コミュニケーションと空間、そして「自己」のゆくえ

近 藤 論

はじめに

本論はコミュニケーション成立の条件を確認した上で、昨今様々な領域で拡大しつつあるコンピュータをメディアとしたコミュニケーションに関する考察の糸口を求めるものである。基本的には社会学において研究の蓄積がある対面的コミュニケーションについての分析を糸口にした上で、コミュニケーションと空間とそこで展開される自己投企のプロセスを媒介に、コンピュータ・ネットワークングにおける自己呈示の問題を考察する際の論点を提示してみたい。

コミュニケーションと空間

人間が他の動物とくらべ特異な存在にあるのは、事物を抽象的に表象しうるシンボルを使用することであると思われる。もちろん人間以外の他の動物にも、人間の言語に相当するコミュニケーション・メディアを有していることはあらためて説明するまでもないが、これほどまでに抽象能力が高いメディアを練れるのは人間の能力によるところが大きいと思われる。

さらに人間のコミュニケーション（相互作用）においては、言語のみならず身ぶりや表情なども加わり、当該コミュニケーションにおいて伝達される意味解釈を複雑にしている。ここにコミュニケーションと空間との関係がみてとれる。なぜなら、少なくとも二つの個体からコミュニケーションが成るなら一定の個体間距離がそこに存在するからである（cf. Hall [1966]）。たとえ「独り言」であっても、それが他者を意識して発話されたものである限り、それら対象（群）との距離が存在することになる。その距離の中で社会的な状況適切性や発話状況、発話形式に基づく何らかの意味・記号のやり取りが行われている。長いテーブル、たくさんの椅子を見る。ここは、大勢の人が収容できる部屋なのか会議室なのか、といった具合に。つまり、「長いテーブル」、「(たくさんの)椅子」が「会議室」という意味を生み出しているのだ、と。

意味の連鎖からなるさらなる意味構成のプロセスが「コミュニケーション」の一つのあり方とするなら（cf. Luhmann [1984]）、そうしたプロセスを可能にす

るすべての「装置」（人間を含め）を含む磁場をここでいう「空間」と位置づけたい。ディメンションの相違に関わらず、意味の相互連鎖の現実、もしくは可能性を導く背景を広く空間と、とりあえず定義しておきたい。

そうした認識上の空間定義に加えて、人間は身体的な存在でもある。ここでは、人間は身体を所有しているのか、もしくは人間＝身体的存在であるのかといった身体論的な問題には触れないでおきたい。だが、対面的コミュニケーションにかかわる場合に、参加者達が互いを物理的な身体的存在として認識しあうということは避けられない。特定の状況下における対面的コミュニケーションの成立条件として「視界の相互性」、つまりコミュニケーションの参加者が互いに知覚しあえるほどに近接しており、かつそのことを自覚している状況が成立していることをE. ゴフマンは挙げている（Goffman [1963 17: 訳19]）。対面的コミュニケーション（「共在」）に関する限り、そこに参加する人々が視覚的に補足可能な位置にいる、身体的に近接していることが前提となるというのである。

A. ギデنزの指摘にあるように、ゴフマンは相互作用における身体と空間の問題にもっとも関心を抱いた社会学者である（Giddens [1984 67f.]）。上述のように、視界の相互性は必然的に外見への関心へとつながっていく。共在のコンテキストに沿うかたちで自己を呈示せざるをえない行為主体（agent）は、髪型、服装、話し方のコントロールを余儀なくされる。そうしなければ、コミュニケーションにおける自己は存在しえないのだから。自己をいかに状況適合性に合致させるか。その間は、自ら、もしくはコミュニケーションの参加者各自が、いま身体がおかれている空間の中でどのような「私」であるべきなのかという問と同義となる。

身体という空間を分節するメディアを有する人間は、それゆえ空間を生きてゆかざるをえない存在である。意味の連鎖を可能にする象徴的な空間と同時に、人は自らの身体が占有する物理的な空間をも生きているのである。

空間研究への視点

空間、特に都市空間というトピックでそれが社会科学で扱われることは決して目新しいことではない。M. ヴェーバーの都市の類型論、G. ジンメル都市論、R. E. パーク、W. バージェスのいわゆるシカゴ学派の一連の都市研究にみられるように、都市という限定が許される限りで、数多い先行研究が存在する。

だが、そこでも「問題」とされたのは、とりわけ都市空間で生を営む人々をとりまくエコノミカル、ポリティカルな現象に限定されていたといえれば強引な

解釈であろうか。A. カープやP. ストーンらによれば、パークやバージェスによる「生態学的研究」は都市のもつ理念型を設定し、「都市には××の機能がある」という視点からの経験的研究にすぎないものであり、そこには人間と空間との心情的 (sentimental)、情動的 (emotional) な結びつきが捨象されているという評価が下されている (Karp, Stone et al. [1991 51-57])。

都市空間に限られず空間は、人間が日常的な生活を送ってゆく上でさまざまな機能を果たしている。ある時は、精神的なゆとりを提供することもあれば、空間そのものが精神上、圧迫を与えるものとして感じられることもあろう。だが、そうした機能は空間の側から一方的に与えられるのではない。その中で生を営む人間の側からも、空間に対してさまざまな「意味-記号」を付与していることも決して無視してはならないのである。

ここでは、そうした「空間-人間」の相互浸透の意味について若干ながら確認しておきたい。相互浸透とここでいうのは、意味的-物理的な空間が醸し出すコンテクストとそれが規定する相互作用との関係、または相互作用を営む行為主体の側からの空間の理解、認識に基づく規定というプロセスを総括して指すものとする。

相互浸透が意味するものは何であろうか。そこで行われる相互作用を、自らのコンテクスト内に位置づけようとし「支配」しようとする空間。そうした「支配」に抗し、またその中でそれを「利用」することで「経験」をつむぎだして行く行為主体。こうした両者の動的なプロセスの中で生成されるのは何なのか。これこそが、コミュニケーションをコミュニケーションに接続させる作用を生みだし、さらにはそれによってコミュニケーションにかかわる行為主体のアイデンティティである自己を決定するメカニズムなのである。

ここでいう自己とは、単なるコミュニケート能力を持つ主体をのみ指すのではない。原理的には、コンティンジェントで予測不可能なコミュニケーションはいかなる主体を予め措定しえない。そこには、意味の連鎖 (シーケンス) があるのみである。そうした連鎖の中で、主体の位置はあくまでその連鎖の内に事後的に「発見」されるものでしかない。つまり、ある意味が後続する意味とつながってはじめて、その意味が確定されるのである (もちろんこの確定とてもコンティンジェントなものであるが)。これとパラレルに、行為主体が何者であるかは、参加しているコミュニケーションの中で、他の行為主体 (もしくは他の誰でもない行為主体) と意味のやり取りをすることによってはじめて「誰か」であることができるのである。自己もまた事後的にみいだされるものなのである。こうした

プロセスの中で行為主体は空間の中で様々な要素を収集し、自己を作り上げる努力をする。それはギデنزが「ポジショニング (positioning)」といったように、コミュニケーションの空間において結晶化した位置取りのサンプルとして「ジェンダー」や「地位」というようなものを位置づける作業でもある (Giddens [1984])。ここにおいて、「空間－コミュニケーション－自己」という結びつきが生まれるのである。

上述の原理的な考察を踏まえ、ここでは日常的なコミュニケーションにおいて行為主体の自己がいかに関与されるのか、それが空間とどのようなかかわりを持つてくるのかということに焦点を当てて考えていきたい。そこでさらに自己を規定しなすと、行為主体がコミュニケーションの過程でその空間内で産出し、他者に呈示してはじめてそれとして認められるものとしておきたい (cf. Goffman [1959 252f. : 訳298])。その自己が相互作用の中で適格的か否かと判断されるのは、その際、生起している相互作用の状況 (コンテクスト) においてである。

冒頭でも述べたように、コミュニケーションと空間との関係は、物理的な面と認識的な面とに分けて把握されるべきである。身体との共有、視界の相互性を確保する閉じた「いれもの」として、また進行するコミュニケーションを規定する意味の「貯蔵所」として。そうした空間はコミュニケーションのみならず、その過程で産出され確認される自己が呈示される闘技場でもあり、かつまた自己がどのように認識されるかというサインが供給される貯蔵所でもある。ここから、自己を実現する空間について二つの視点が導かれる。それは、自己を規定する空間と、自己として規定される空間である。次では、それぞれについて簡単に説明を加えておきたい。

自己を規定する空間

個人がアイデンティティ存立の場としてしばしば活用する空間がある。プライベートと呼ばれる空間はそうした一例であるが、それ以外で用いられる空間も存在する。極度に閉鎖的かつ統制の行き届いた空間、たとえば学校や刑務所、病院などといった全制的な施設においては、空間は経験的に規制された形で、いわば「あてがいぶちに」与えられたものとして規定される。またそれほど統制的でない組織においても同様な状況はみられる。つまり、固有のコード、いわばコンテクストが確固たるレリヴァンスとして作用している状況ではこうしたことは共通してみられるということである。

ある固有のコードが共有された空間では、役割、振る舞い、発話等に関するあ

る種の正統性が付与される。たとえば、デパート、鉄道の駅などでは、サービス享受者（＝クライアント）－サービス提供者といった相互作用の環境を規定する立場上の役割が比較的明確に規定されている。こうした環境においては、相互作用が円滑にとりおこなわれるために正当化された役割の遵守が義務づけられる必要がある。ゴフマンの主張によれば、このような立場設定、役割間の線引きは相互作用の環境における物質的な諸装置に依拠することで可能になるという（Goffman [1959]）。「局域（region）」と称されるものがその機能を果たすのである。

簡単に説明すると、相互作用がおこなわれる環境（例では、デパートなど）において状況の維持に貢献する明確な役割間の線引きを効果させる局域は「フロント」と称され、「フロント」で呈示されてはならない動機、言行をふくむ「役割」の発現が認可される（もちろん相互作用の成員による「作業のコンセンサス」の効果としての意味において）局域は「バック」と称されている（Goffman [1959 106ff., : 訳124ff.]）。この「バック（裏）」局域はいわゆる「休憩所」であったり、精神の安楽の場所であったりするのである。つまり、「タテマエ」の「フロント」に対し、「ホンネ」の自分が出せる場が「バック」なのである。コーエンとテイラーが「飛び地（activity enclaves）」と呼んだ活動領域もこうした、アイデンティティ確立のためのリアリティを保証してくれる場にほかならない（Cohen & Taylor [1976= 訳123ff.]）。ゴフマンが『アサイラム』で提出した「第二次適応」も、精神病院という完全な管理体制下におかれた患者の「自己性（selfhood）」維持のための、組織の「抜け穴」を模索する活動であった（Goffman [1961 172ff. : 訳200ff.]）。

注意したいのは、これらの局域の区別が物理的装置によって可能になるだけでなく、現在そこでおこなわれている相互作用のコンテキスト内で有用だとみなされる（presence-availability）レリヴァンスに沿っても規定されているということである。この意味で空間の中で存在可能な自己は「空間的な存在」であるといえよう。

自己として規定される空間

上述のプロセスに加えて「空間的自己」の由来は、行為主体が身体を「所有」しているという解釈にも求められよう。身体は必ずしも自己そのものではないが、身体におけるコントロールの不備の責は自己に帰属させられる。

たとえば、通りを歩いていてうっかり人とぶつかるというケースを想定しよう。

ぶつかった人は、それが故意ではなかったことを、ぶつかった人に対して釈明する必要がある。そうした釈明は以下の機能を満たすものでなければならない。それは、一つには「あなたに対してなんらの敵意は持っていない」ことを示すことで、相手の気分を鎮静化させる機能。二つには、相手の「人格＝フェイス」を一時的にせよ損ねたことへの、儀礼的な返礼行為という機能。そして、三つめに身体のコントロールミスに対し、それが一時的なものであって、決して自分がそうした能力を欠いた存在ではないことを相手に知ってもらうための戦略的な機能である。

こうした機能に基づく表出の一切は、「路上でぶつかる」という不意の相互作用で生じた状況における自己呈示の手法として解釈できるのである。ゴフマンが「修復作用 (remedial interchanges)」と呼んだものは、身体を通しての自己のコミュニケーション能力の実践のあり方である (Goffman [1971 95ff., 138ff.])。ではなぜ、こうした相互作用の機制が必要とされるのであろうか。それは、ひとえに自己が空間的な存在としても認識されることに起因するからであると考えられる。ではこの「空間的自己」とはいったい何であらうか。それは、簡単にいえば、身体をメディアとして可視的、可聴的に拡大・縮小可能な領域の中で実現され、呈示される「情報の束」ということになろう。

身体は、ある一定の空間上の分節を物理的に可能にする存在のみならず、情報を伝達するメディアでもある。「身体＝情報」の公式は、自己を相互作用の状況下で呈示するプロセスにおいて、きわめて深刻な帰結をもたらす。「ノーマルさのショー (a show of normalcy)」や「スティグマ」といった概念によってゴフマンが描き出したのは、まさに「自己」を守るための行為主体の精一杯の戦略の数々であった (Goffman [1963], [1971])。ここで「情報」というのは、それが帰属するとされる行為主体の意図・非意図にかかわらず「伝達された」ものとして他者によって受容され、認識される限りで行為主体の「自己」の「何か」をあらわすものとして解釈される「表象」という意味においてである。ゴフマンによれば、こうした「身体的情報」には、社会的な解釈枠組に依拠する形でさまざまな語彙があてられる（「身体イディオム」、「サイン搬送体 (sign vehicular)」）(cf. Goffman [1963])。

そうした情報の解釈をめぐる、行為者同士の集う空間内でのさまざまなやりとりが繰り返される。それは当該空間の中にもう一つの下位の空間（私空間）を作り出す作業でもあろう。そうした作業のため空間内に伝達されるあらゆる「情報」をコントロールすることに全神経が払われるのだ。

身体が自己を、物理的にも、「情報＝記号」的にも表象することを確認してきた。では、自己呈示における空間とのかかわりはどんな形であられるのであろうか。先に路上で人とぶつかった事例をあげたが、他者との相互作用においてはそうした物理的な近接性（proximity）に固有の意味が付加される。E. T. ホールは空間における個体間距離を「密接」、「個体」、「社会」、「公衆」の四位相に区分した（Hall [1966＝訳160ff.]）。しかし、この区分はあくまで自己呈示の際の物理的なコンテキストを規定するものに過ぎない。再びゴフマンの概念によれば、相互作用のコンテキストを規定するもしくはそのコンテキストから規定される空間には、1. パーソナル・スペース、2. 特等席（the Stall）、3. 使用上の空間（Use Space）、4. 順序空間（the Turn）、5. 套われる空間（the Sheath）、6. 所有物によるテリトリー（Possessional Territory）、7. 情報上の所有空間（Information Preserve）、8. 会話上の空間（Conversational Preserve）というのがあるという（Goffman [1971 29-41]）。

これらの類型は厳密な線引きのもとに区別されるものではなく、あくまで認識上の意味区分に過ぎない。問題はこうした空間利用の「手だて」が、なぜに必要とされるのかということにある。それはひとえにコミュニケーションをおこなっている複数の行為主体の自己を保持するための方策であり、自己のテリトリーを区画するための戦略が要請されるからである。そこには、「他者」の存在を前提とし、それに対しいかに自己の領分を確定するか、またそれによってどれだけ「他者」への攻撃的な行動を抑制可能かという点を最大限に満たすという動機づけが存在する。なぜなら、コミュニケーションのコンテキストにおいて「適切」とされる自己はそうした形でしか存立しえないからである。

自己は身体的な存在とみなされる。同時に、自己はその身体をメディアとして「伝達」される情報によっても特定される。そのような自己が行為主体にとって守られるべき存在であるなら、それは「他者の自己」にも当てはまることでもある。「聖なるもの」として相互に尊重し合うことでのみ自己は相互作用内で存立しうる。相互作用は複数の身体から構成されている。複数の身体が、互いに固有のコンテキスト（状況）の中で傷つけ合うことなく「共在」を「生きて」いるのである。その「生きる」ための「手だて」として、行為主体は「どこに」身をおくか、「どのように」振る舞うか、「何を」用いるかを絶えず決定し、実践に移さねばならない。そうした「手だて」が相互作用のコンテキスト内で結晶化したところに自己が生じるのだから。

ここまで身体を伴った対面的コミュニケーションに限定してコミュニケーション

ンと空間の関係について述べてきた。次に述べるコンピュータ・ネットワークの空間、W. ギブソンの小説によるところの「サイバースペース」においては、生物学的な身体もそれらが配置される空間も存在しない。あるのは拡張されたメタファーとしての「身体」(M. マクルーハン)と電子空間のみである。そこで展開されるコミュニケーションにおいて自己はいかなる存在であるのだろうか。コンピュータ・ネットワークにおけるコミュニケーションを考える場合に、対面的な状況下での議論がどこまで適用可能かを考えてみたい。

コンピュータをメディアとしたコミュニケーションの実態

近年、インターネットをはじめとするコンピュータ・ネットワーク技術の進歩はめざましいものがある。かつては大学や研究機関での学術的な利用に限定されていたのが、一般に身近になり利用者の増加もみられる。ある企業の調査によれば、日本におけるインターネットの利用者数は1998年2月の段階で1009.73万人という結果が示されている。これは1995年12月の段階(510.0万人)と比較して20倍近くの増加率である(日本インターネット協会 [1998])。

マスメディア等での宣伝効果や、企業内での仕事内容がコンピュータに支援された内容のものにシフトしつつある結果が、このような伸び率を招来したことは想像に難くない。しかし、そうしたネットワーク利用における実践上の諸問題についての考察は、いまだ端緒についた段階でしかないように思われる。ここでは、コンピュータ・ネットワークにおけるコミュニケーションを考察する際の論点を提示することを試みることにする。コンピュータを用いたコミュニケーションといってもその内容や用いられる技術内容はさまざまである。その中で一般的なインターネットを介した各種サービスについて簡単に触れておこう。

「WWW (World Wide Web)」は一般に「ホームページ」とよばれているが、テキストのみならず音声や画像を張り付けたドキュメント(ハイパーテキスト)をインターネットの回線を通じて閲覧可能にしたサービスを指すものである。これは情報の提供や取得に役立つものであるが、双方向的な情報の送受信を主目的とするものではない⁽¹⁾。また、「ニュースグループ」と呼ばれるものはいわゆる「電子掲示板」のようなもので、さまざまなトピック別に開かれた掲示板にテキストを書き込む(掲示板の性格によってはバイナリーと呼ばれるファイルを張り付けることも許可されている)ことで、情報の共有化や共通のトピックについての議論が展開される場である。同じような形態のものは「パソコン通信」上にもすでに存在しており俗に「フォーラム」と呼ばれるものがそれにあたる。インター

ネット上で個人と個人を結ぶコミュニケーションにおいて用いられるものが「電子メール（Eメール）」である。これはファックスと同様に、相手が不在であっても、発信者のメッセージをコンピュータを介して相手に届けるというもので、受信者は各自の都合に合わせてメッセージを受信すればよい。これらコンピュータを介した「新しい」コミュニケーションは、機能的には電話・ファックスで代替可能な形態もあるが、コンピュータという単一の機器でそれらすべてのサービスが享受できるという点で既存のどのメディアとも異なる。また一対多、多対多といった関係が同時に結べるという点でもコミュニケーションにおける可能性を拡大させるものである。

テキストベースの自己呈示

電子メールやフォーラムと呼ばれる会議室、また「チャット」と呼ばれるリアルタイムでのネットワーク・コミュニケーションなどでは、先に述べたような発話状況を規定したり、身体を媒介として成立するような空間は存在しない。こうしたコミュニケーションにおいて交わされるのは主として書き言葉としてのテキスト（エクリチュール）である。またそうしたテキストを「どこから」発信しようとも、コンピュータのディスプレイに現れる情報を受信する限りでの共時性が存在するのみである。電子メールであれば必ずしも送信時にリアルタイムで相手に受信を要求する必要はないし、チャットであれば時空をこえた双方向的な共時的空間がディスプレイを介して成立する。

また身体を伴わないこと、コンピュータと結合したコミュニケーションであることといった特性により、発信されたメッセージが二次的に利用可能であり、結果として情報発信者としての主体性を拡散させてしまうことになる（電子メールの「引用」やニュースグループの「スレッド」など）。この意味で、前述の対面的コミュニケーションにおける「自己＝主体」としての地位を確保する努力は無意味になる。そこではあくまで電子コミュニケーションの空間でのみ通用する自己投企がおこなわれねばならない。このような主体性の拡散を肯定的に評する可否定的に評するかは論点が分かれるところである（cf. Poster [1990]）。もちろん、各種ネットワーク上で運営される掲示板やニュースグループなどでは、「自己紹介」様の手続きを経ないと参加できないシステムになっているところもある。しかし、そうしたイントロダクションもあくまで電子コミュニケーションにおける空間のコンテキストに準拠した形式でのみ判断される。名刺を差し出したり、相手の風貌や話し方といった要素はすべて捨象されたテキストラインがすべての

レファレンスたりえるのである。「間」といったものやノンバーバルな要素は不要なのである。

つまりコンピュータ・ネットワーク上における自己呈示はテキストをベースにした、極めて「リニア」なシーケンスに還元されるのである。W. J. オングの指摘にもあるように、音声ベースの文化においては発話・発声がおこなわれた状況に依存する割合が大きく、文字ベースの文化においては空間的な同時性や共在性は重要でなくなり、代わって抽象的な思考やランダムなアクセス性が高まるといふ (Ong [1991])。さらにこうした電子コミュニケーションの空間では文字のみが唯一の表現手段で、しかもそれは「自筆」といった電子コミュニケーション「外」のユニークさを排除したあらたな「自己創出」の試みでなければならないのである。ではこうしたコンピュータ・ネットワークにおけるコミュニケーションは、実際にどのような形式で行われるのだろうか。ここではニュースグループを例にみることにする。

ニュースグループの参加者は大別して「投稿者」と「ROM」とに分かれる。「投稿者」とは電子掲示板に情報を投稿する者を指し、「ROM」とは投稿はせず掲示された情報を「読むだけ」の者を指す⁽²⁾。ニュースグループは特定の情報内容によって細かく区分されているが、「適切な」情報であれば誰にもどこでも書き込み可能である。ニュースグループは一見誰にも開かれた公共性の強いように思える場所であるが、前述のコンピュータ・コミュニケーションの特性により、テキストベースで適正な情報提示がおこなえる者のみがヘゲモニーを握る格好になってしまう。端的に言えば、テキストベースでイントロダクションや情報の「適切な」提示をおこなえない者は排除される空間なのである。しかも、そうした空間を構成する要素もあくまでネットワーク上（オンライン上）のテキストなのである。最初は「投稿者」であったのが「ROM」に転じたり、グループに参加する時点でのイントロダクションで疎外感を受ける例も少なくない（池田 [1997]、川上他 [1993]）。それはテキストに表象された表現が、書き手本人の「意図せざる結果」として「やり玉」にあがったり「揚げ足をとられ」たりする可能性を常にはらんでいるからである。

「フレーミング (flaming)」という語はまさにそうしたコミュニケーションの齟齬がネットワーク上で発生して收拾がつかない状況を指している。個人のテキストが引き金になり、その解釈や意図をめぐった争い（テキスト上での）が、火に油をさすがごとく燃え広がる。行き場がなくなればやがてネットワーク外の社会にまで燃え広がる可能性もはらんでいる。またすべてがネットワーク上のコ

ンテキストに準拠した形で適切性が判断されるため、中には「ネット人格」というような性別や年齢を偽って投稿する者も存在する (Kendall [1998])。「偽る」といってもそれは実社会の本人の属性と照会した上での話であって、ネットワーク上でそれが「リアル」と見なされ受容されれば「真」となるのである。この意味で、原理的にはコミュニケーション (テキスト上での) におけるさらなる別のテキストの接続で新しい意味を創出するという解釈が可能である。しかし、そこには身体を伴わない、また身体的な空間内の実践を欠如させたテキスト・オンリーの意味の連鎖しか存在しない。意味の構成要素はすべてコンピュータ・ディスプレイ上のテキストの配列のみであり、ネットワーク外 (オフライン) 上で用いられる意味は排除されるかオンライン上でのテキストに変換されるしかない。そこにおいて、コンピュータ・コミュニケーションにおける「適切さ」が決定されるのである。もはや「空間」という語はここにきて全くのメタファーでしかないのかもしれない。

小括

こうした身体・音声といった既成のコミュニケーションを構成する要素を全く持たない新たなコミュニケーションがわれわれの生活に浸透しつつある現状を考えると、こうしたコミュニケーションについての基礎的な考察をさらに深める必要があるように思われる。それぬきにしては、ネットワーク上のコミュニケーションと実社会との関わりを考察することはできない。「ニフティサーブ訴訟」といわれる事件が法廷での判決をみるに至ったことを考えても、電子空間におけるコミュニケーションと日常世界のコミュニケーション空間との「相互浸透」の問題はこれからあらゆるところで問題になってこよう。オンライン上で展開される世界のありようを単なる「フィクション」と片づけるわけにはいかない。予想される問題に対して理論的な考察が今後どのレベルまで通用可能かを改めて確認する作業を怠るわけにはいかないであろう (この稿未完)。

【注】

- (1) WWW を用いたアンケートや簡単なコメントの収集ということは技術的に可能であるが、あくまでも意見を収集する側の意向に沿った情報の断片しか要求されない形式になっているのが通常である。ホームページを見ての感想などを空欄に答えさせる形式等に対応する形式が多くみられる。
- (2) 本来「ROM」は「Read Only Memory」の略称で読みとりのみ可能な記憶

媒体を指すが、コンピュータ・ネットワークの世界ではアクティブに情報提供をせずその取得（読む）のみに回る側をこのように称することが多い。この意味で関連文献でも頻繁に用いられている。

【参考文献】

- Cohen, S. Taylor, L. 1976 *Escape Attempts: The Theory and Practice of Resistance to Everyday Life*, Penguin. =1984 石黒 毅訳【離脱の試み 日常生活への抵抗】法政大学出版局。
- Foucault, M. 1975 *Surveiller et Punir-Naissance de la Prison*, Gallimard. =1977 田村 俣訳【監獄の誕生・監視と処罰】新潮社。
- 月刊アクロス編集室編 1992【ポップ・コミュニケーション全書】アクロス編集室。
- Giddens, A. 1984 *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Univ. of California Press.
- Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everydaylife*, Doubleday Anchor. =1974 石黒 毅訳【行為と演技】誠信書房。
- 1961b *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday Anchor [Penguin, 1961]. =1984 石黒 毅訳【アサイラム】誠信書房。
- 1963 *Behavior of Public places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, FreePress. =1980 丸木恵祐・本名信行訳【集まりの構造】誠信書房。
- 1971 *Reletions in Public: Microstudies of the Public Order*, Haper & Row.
- Hall, E.T. 1966 *The Hidden Dimension*, Doubleday & Company. =1970 日高敏隆・佐藤信行訳【かくれた次元】みすず書房。
- 池田謙一編 1997【ネットワークキング・コミュニティ】東京大学出版会。
- 金子郁容・松岡正剛・中村雄二郎・岡田智雄他著 1997【電縁交響主義 ネットワークコミュニティの出現】NTT出版。
- Karp, A. Stone, P. Yoels, C. 1991 *Being Urban: A Sociology of City Life*, Second Edition, Praeger.
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 1993【電子ネットワークキングの社会心理 コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート】誠信書房。

- Kendall, L. 1998 "Meaning and Identity in" Cyberspace: The Performance of Gender, Class, and Race Online" *Symbolic Interaction* 21 (2).
- Luhmann, N. 1984 *Soziale Systeme, Grundriss einer allgemeinen Theorie*, Shurkamp. =1993 佐藤 勉監訳『社会システム論(上)』恒星社厚生閣。
- Morey, D., Robins, K. 1995 *Spaces of Identity Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*, Routledge.
- 日本インターネット協会編 1998『インターネット白書'98』インプレス。
- Ong, W.J. 1982 *Orality and Literacy The Technologizing of the World*, Methuen & Co. Ltd. =1991 桜井直文・林 正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- Poster, M. 1990 *The Mode of Information* =1991 室井 尚・寺岡 洋訳『情報様式論』岩波書店。
- 1995 *The Second Media Age*, Polity Press.